

# ぼうさい通信 Vol.11



平成 30 年 5 月 16 日発行  
熊本県立湧心館高等学校

## 今月のテーマ「防災への備え」

2016年4月に起きた熊本地震から早いもので2年が経ちました。先日も宇城地方で震度4を観測した地震が発生しました。だんだんと地震の回数も減ってきてはいますが、日本全国また熊本県内でみても地震が無くなることはありません。

テレビやラジオ、携帯電話、スマートフォンが普及しているこの時代において、情報は簡単に入手することができるようになりました。様々な情報に翻弄されることなく、自分で考えて行動できるようにしておかなくてはなりません。素早く行動できるように日頃から考えてみましょう。

## 防災の備えとは

このリストは1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災の被災経験者の声を反映させて作った「非常持ち出し品リスト」(※、その後17年以上の月日が流れる中で変化した社会情勢や、遠隔した防災・減災の対策を考慮し入れ、誰もが自分の備えをはじめためのガイドとなるよう改定したものです。これを使って防災準備をはじめ、いつかは遭遇するかもしれない自然災害への備えを始めてください。【この相紙はダウンロード・コピーして、減災の準備にご活用ください。】(※)ご質問は防災の相談センターまでお問い合わせください。kikaku@nkc.jp)

リニューアル版(Ver.1) 20120422  
編集「ひとぼう未来センター」  
発行「阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター」

●非常時に備える3ステップ。まずは、1次から。ついで、0次・2次も。

**0次の備え**  
いつもケータイ！  
「非常持ち出し品」として備えるものの中から、携帯ができればいいものは、いつも使うバックや、ポケットに入れ、身につけてみよう！  
いつどこで被災するかわからない災いへの安心感を持ち歩こう。

**1次の備え**  
非常持ち出し品  
家庭や勤務先……1日の多くを過ごす場所には「非常持ち出し品」を備えよう！とっさの時に、さっと持ち出して逃げられるコンパクトな1バック。  
●被災の1日、命が安全なところへ逃げるときにこれだけは持っていきたい、という最低限の備え。  
●合わせて印・封筒を守って逃げられる備えも。  
●どこに置く？玄関・寝室……持ち出しやすいところに、車のトランクに準備を置くのも良い。

**2次の備え**  
安心ストック  
非常時、ライフラインが途絶え、もしも助けの手が届かなくなったとしても、何日かは自給自足してしのげる物品を揃えよう！  
●キャンパンや、押し入れ、ガラス、物資などに、ケースにまとめ取り出しやすく、持ち運びやすい。  
●飲料水など清浄度は、少なくとも3日間分は確保したい。  
●ライフラインが止まった状態で、被災生活を過ごすことになるかもしれない時に、安心なセットを考えよう。

●グッズを揃える心がけ、4つ。

**1年に2回は、チェックしよう！**  
■次のチェック日を決めておこう。  
■飲料・食品の賞味期限、薬品や電池の使用期限等をチェックして新しいものに交換しよう。それぞれの品物が古くて劣化していないか、確認しよう。  
■保存食品は交換の際に試食しよう。  
■衣類など、季節で変わる必需品を取り替えるために、年2回、春と秋。

**使い方を覚えよう、身につけよう！**  
■つかい方を身につけてこそ、いざという時に役立つ。慣れ親しんで、身体で覚えられよう機会を持つよう。  
・ロープの結び方  
・簡易トイレのつかい方  
・救急箱の中身、ケガの手当。  
・三角巾のつかい方  
・簡易防雨具(サバイバルブランケット)……etc.

**日用品の汎用性。工夫・知恵を知ろう！**  
■日用品に使うものは、いざというときにさまざまな用途で役立てられる。それぞれの可能性を知り、実際に試してみよう。  
・新聞紙、ラップ、ビニール袋……  
■これまでの被災経験者の声から、知恵・アイデアを調べてみよう。  
■情報をウェブサイトなどでも入手・確認してみよう。

**「自助」に加えて、「共助」の備えも。**  
■いざという時は誰かが、助け、助けられる立場になる可能性がある。わが家の備えだけでなく、町内会・自治会などでの共同の備えが、どこに、どのようにあるか、確認しておこう。  
■自治体からのハザードマップ、非常時の行動、備えのインフォメーションを確認しておこう。  
■地域の防災訓練に参加しよう。

これは兵庫県にある『阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター』の資料です。1995年の阪神・淡路大震災を経験して、復旧復興を目指すと同時に、防災・減災教育にも力を入れています。これらを全て準備するのは大変だとは思いますが、1次の備えにあるとおり、「被災の1日、命が安全なところに逃げる時にこれだけは持っていきたい」という最低限度の備えだけでも準備してみましょう。いつ起こるか分からない大震災に対して、すぐに対応できるように考えてみましょう。